19世紀のフランス文学と結核（中編）
アブーの『ジェルメーヌ』とゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』

寺 田 光 徳

［小論に先立つ「前編」は『文学部論叢、第100号』熊本大学文学部、2009年、後続する「後編」は『文学部論叢、第101号』、2010年、に掲載］

1. エドモン・アブーの『ジェルメーヌ』

19世紀後半に多彩な文筆活動を展開しヴォルテール二世と称えられたこともあったエドモン・アブー（1828-1885）という作家のことを知っているものは、フランス文学の専門家でもあまり多くはいまい。その彼が肺癆を患う妙齢の女性を主人公にした『ジェルメーヌ』（1857）という小説を書き、それがまたサスペンス感を盛り込んだバルザック風のおもしろい作品だったことを知るものはもっとまれであろう。絶版の書物を再度世に送り出そうとしているアメリカの「ビブリオバザール」というコレクションがその『ジェルメーヌ』を最近復刻したので、フランス語さえ読めればわれわれもまたこの作品を楽しめるようになった。[1] 今までほとんど知られていなかったこの小説を、肺癆に関わる事項を交えて、手短に紹介しておこう。

物語は1853年１月に始まるという設定である。ドゥ・ラ・トゥール・ダンブルーズ公爵家の令嬢ジェルメーヌは、主治医の所見では、肺癆のせいで余命も４か月ほどだろうということであった。またその主治医によると、彼女の病気はそもそも遺伝性ではなく、流感を軽視してこじらせてしまい、あげくに一家の貧窮も加わって、寒い部屋に病人を置き去りにされ、必要な手当もされなかったからであった。もしも一家の主である公爵が娘ジェルメーヌの状態を危険だと見てただちに財産の濫費を自ら改め、どこかで金を工面してきて、半年前から医者たちが勧めていたように、エジプトかイタリアに転地療養をしていれば、彼女はこのように手遅れにはならなかったであろう。それでも公爵は自分のこと以外には無関心で、金のことも娘のことも何とかなる、なるようになるとしか考えていなかった。今では主治医ル・ブリスの気がかりは、ジェルメーヌのいくばくもない余命もさることながら、娘に始終付き添って看護していた公爵夫人が娘の病気に感染して、娘と同じ病気の兆候を見せ始めたことであった。しかし小説に描かれたその日も公爵夫人は家に一サンチームも見つけることができずに、なけなしの結婚指輪を宝石屋に買い取ってもらって、何とかその日の食べ物と、娘の病気治療のために鱈の肝油を手に入れたのである。

そんな公爵家の絶望的な状況に、５万フランの年金を義父に付けるから余命幾ばくもないジェルメーヌを嫁にくれないかと、パリに住むスペイン人の大富豪ド・ヴィラネラ伯爵から奇妙な結婚話が舞い込む。なぜなら、この伯爵は社交界では美貌で評判のシェルミディ夫人との間に子供をつくってしまい、彼女には商船の船長である夫がいるので、そのことを表沙汰にできない。そこでジェルメー

ヌと結婚すれば、伯爵の方は身分のうえでもふさわしい結婚になり、子供も正式に認知できる。またジェルメーヌを嫁にすれば結婚後すぐにも死んでしまうだろうし、シェルミディ夫人と関係も続けられるし、万事好都合だろうというわけである。

いくら自分のことしか考えないというダンブルーズ公爵でもそれは拒否するが、話を聞いたジェルメーヌ自身が、家の窮状と母親の病気療養費のことを考慮し、残る命を家族のために犠牲にしようと自ら申し出たため、その話はまもなく成立する。すぐに結婚式が行われ、翌日になると新婦の療養のためにという理由で、あたふたと新郎のドン・ディエゴ、その息子でもう2歳になったゴメス、そしてドン・ディエゴの母親である伯爵夫人からなる一家が転地療養に旅立つ。彼らはニース、ローマ、ナポリなどに滞在するがいずれもあまりジェルメーヌのためにはならないと判断し、最終的にはイオニア海の島でギリシアのコルフ（コルキュラ）島を療養地として選択した。コルフ島で療養して肺癆を治したという何人かに出会ったからだった。

コルフ島での療養の効果、それから奇縁で結ばれたドン・ディエゴの新婦に対する誠実で思慮深い対応、義母の手厚い看護、すぐに新しい母親のジェルメーヌになついてきたゴメスなどの周囲の暖かい愛情もあって、ジェルメーヌの肺癆は奇跡的に快方に向かう。

パリで今か今かとジェルメーヌの死を待っていたシェルミディ夫人は、病気で帰ってきた伯爵家の召使いの代わりに腹心の部下マントゥーを送り込む。この召使いは一計を案じて砒素によって密かにジェルメーヌの死を早めようとするのだが、暗殺計画が露見しないようにと少量づつ砒素をジェルメーヌに飲ませたため、逆にそれが肺癆に対して治療効果を発揮してしまう。

当初は警戒し合っていた夫婦も病気の介護を通じて互いの人柄を認め合うようになり、ついにドン・ディエゴはシェルミディ夫人よりもジェルメーヌの方に妻としての愛情を抱くにいたる。ジェルメーヌは晴れて自分たちの愛情が夫婦の間で共有されたことに感激し、病気からの快復を早めて一刻も早い幸福の実現を得ようと、いつもやっていた治療法のヨード吸入でヨードの量を増やして人事不省に陥ってしまう。しかしジェルメーヌは1週間後に一家や彼女の介護のためにコルフ島まで付いてきた医者のル・ブリスの努力のおかげでこの危機から脱出できた。

物語の最後にはジェルメーヌがいまや確実に病気からの快復の途をたどり、それと対照的にシェルミディ夫人の方は腹心の部下だったはずのマントゥーにも裏切られ殺されて、この小説は終わりを告げる。

2. アブーと医学的知識

『ジェルメーヌ』の作者エドモン・アブーはフランス文学史中では写実主義の作家として位置づけられ、多彩な活躍ぶりから「才気にあふれた」と形容されたりするが、それは『プティ・ロベール固有名詞辞典』(*Dictionnaire universel des noms propres. Le Petit Robert 2*) で紹介されているように、「科学の進歩に触発された」フィクションを書いたからでもあった。ところでこれまで見てきた肺癆に関するいくつかの代表的な物語と比較してみると、アブーの『ジェルメーヌ』だけはうら若き女性主人公が肺癆から癒えるというハッピーエンド仕立てになっており、一見すると底の浅い物語だとの恨みが残らざるをえまい。だが、結論を先取りして言うなら、物語を支配する病理にのっとった肺癆の進行や、基本的には肺癆の治療法に依拠した説話の展開を追うと、作者アブーが当時の先進的な医学に明るく、むしろハッピーエンドもそのような該博な知識から要請されて出てきた結果であり、

安直な仕立てだと単純に言い切ることはできないようである。

われわれが前回（「19世紀のフランス文学と結核（前編）」）バルザックの『あら皮』やデュマ・フィスの『椿姫』を検討する際に参照した医学の専門的文献は『医科学辞典』（1812-1822）であったが、それは『ジェルメーヌ』の出版時点から振り返ると35年前にさかのぼる文献で、おそらく才気煥発なアブーにすればすでに古色蒼然とした代物でとても参考にしたくなるような専門書ではなかったであろう。その証拠に『ジェルメーヌ』に抗肺癆治療薬として挙がっていた砒素やヨードというのは、その『医科学辞典』では見いだすことができない。『ジェルメーヌ』とほぼ同時代に発行され、おそらくその時代の医学的知識の水準を具体的に表していると推測されるものを挙げるとすれば、『ジェルメーヌ』が出版された1857年の７年後にあたる1864年から1889年にかけて出版されたドゥシャンブルらによる100巻本の『医学百科辞典』[2] が適当かもしれない。それというのも、ちょうどそこには砒素とヨードが肺癆のための薬剤として推奨されているからである。

その砒素の薬効は、相対的ながらも傷害に直接働きかけ、病原体を撃退し、傷害された組織を修復する効果がある、とみなされている。[3] また『19世紀ラルース大辞典』の砒素の項目では、この砒素というのは古くから知られた毒薬で、薬効は認めらるが危険であるという理由で長い間薬剤としては遠ざけられていた、しかし最近、ということは19世紀になってから、慎重に少量ずつ投与すればとりわけ肺癆を含む慢性病にはめざましい効果を発揮することが明らかになった、と記されている。このようにアブーは、肺癆の治療法から見る限り、『ジェルメーヌ』を書くに際していち早く最近の科学的な研究成果を自らの小説に取り込んだということになるだろう。

実際に『ジェルメーヌ』では、シェルミディ夫人の送り込んだ召使いのマントゥーがジェルメーヌを暗殺しようと数グラムの砒素を買い込み、二人分の致死量に当たるひとつまみを大きなガラスのコップで水に溶かしておいて、それを病人が毎日飲んでいる砂糖水に数滴垂らすという方法でゆっくりと殺していこうとしたことが語られている（*Germaine*, p.120）。どうして彼が女主人をひと思いに毒殺しなかったかというと、肺癆が快方に向かっているさなかにジェルメーヌが急死でもすれば、すぐにも毒殺が露見してマントゥー自身疑われる危険があり、それを避けるには少量ずつ砒素を摂取させ、それがやがて体内に蓄積されて致死量に達して病人が死ぬように細工すれば問題は生じないと考えたからであった。しかし、語り手に言わせれば、それが砒素についての歴史や薬理学を知らない素人の浅はかさで、マントゥーは砒素が体外に排泄されることや砒素に肺癆に対する薬効のあることなど思いも及ばなかった。そのため彼の期待とは裏腹に砒素は結局ジェルメーヌの肺癆に治療効果を発揮してしまったのである。さらに語り手は「薬剤の微粒子が肺にはいると外部の空気に触れて燃焼し、そして人為的な呼吸作用を発生させる」（*Ibid.*, p.132）、すなわち砒素がとりわけ肺癆患者の呼吸困難を解消させる働きをすると、いかにもそれらしい薬理学的見解を披露し、その後に熱を抑え、食欲を増進させ、睡眠をもたらし、体を太らせ、しかも他の薬剤の治療効果を高めることすらあるとまで言って、砒素の利点をひとかたならず強調することさえしている。

その砒素との相乗効果でジェルメーヌに急速な快復を促したのが他方のヨードという「新しい薬品」であった。われわれにはヨードチンキという殺菌剤でおなじみのヨードまたはヨウ素は、『19世紀ラルース大辞典』によると、1811年にクルトワが発見した新しい化学物質で、自然界にはひばまたに代表される海藻類、また海綿や海に生息する軟体動物に含まれる。このヨードには強力な殺菌作用が存在することが明らかになり、急速に薬剤として普及していったようである。ただしこれまた危険

な薬剤で、恒常的に摂取するとヨウ素中毒に陥ったり、誤って経口摂取した場合2～3グラムの量で死にいたる。[4] ジェルメーヌは毎朝医者のル・ブリスが付き添って1日1回、毎朝3～4分かけて辛抱強く吸入療法を施している。(*Ibid.*, p.133) しかしジェルメーヌは自らの恋する思いが夫のドン・ディエゴに通じた感激から自制力を失い、自分の病の快復を早めようとル・ブリスに無断で許容量を超えてヨードを吸入し、急性中毒に倒れたことはすでに記した通りである。(*Ibid.*, p.141) ジェルメーヌはこのヨード中毒の危険からも脱してついに肺癆からの快癒を果たすのであるから、危険を承知で慎重に処方すれば肺癆に対するいわばヨードの霊験はあらたかだとアブーが考えていたことになろう。

肺癆治療の観点からこのアブーの小説をまとめてみると、ジェルメーヌが肺癆から快復しえたのは結局ギリシアのコルフ島で転地療養をし、そこでヨードという新たな薬剤の治療を受け、またそこに砒素という相乗効果をもたらす薬剤が加わったからであった。われわれの参考にしたドゥシャンブルの『医学百科辞典』はまた、ジェルメーヌの肺癆の転地療法にふさわしい療養先としてコルフ島を挙げており、既に見たように砒素とヨードの効用も説いていた。そこでアブーが小説に利用した医学的知識は同時代においては最新のものであったと言ってよかろう。

ところでこの辞典は1864年から1889年にかけて出版されたので、コッホの結核菌発見（1882）という結核史における画期的事件を肺癆の病因論の項では当然ふまえている。だが病因論における一大発見がすぐにも肺癆の予後や治療法に影響を及ぼして明るい展望を繰り広げるというわけにはいかない。この辞典の肺癆に関する予後の記述は相変わらず「語の絶対的な意味において、結核の傷害は不治である。なぜならそれは必然的に乾酪変性や硬化にいたり、どちらの場合にも程度の差こそあれ一定の領域や割合で肺の組織とその機能の破壊を生じさせるからである」(p.777) と悲観的な意見をはっきりと述べている。したがってこの辞典に掲げられている転地療法や、砒素、ヨードの化学療法も、あくまでも病状の進行を阻止するか、あるいはその症状を軽減するためのものであり、こうした療法に従えば病気から快復するとは決して主張しているわけではないのである。

要するにアブーは、後世のわれわれから見ると、時代の先端的な知識をいち早く自らの作品に取り入れて彼の才気煥発な性格を遺憾なく発揮しているが、その反面あまりにも科学を無批判的に信仰して楽観的な世界観をのぞかせていると言うことができるだろう。

ただしことはそう単純に割り切れないかもしれない。なぜなら、文学における医学的知識ないしは科学的知識の利用というこの問題は、アブーのみならずどの時代の作家にも通有の普遍的な問題として浮上してくるだろう。とりわけアブーの同時代の作家にとって医学に関する先端的知識は、彼らの衒学性を誇示するために利用された衣装であるよりも、優れて彼らの説話法の構成原理として役立っていたし、その点では彼らの標榜するリアリズム世界を保証するための不可欠の要素のひとつとしてあったからである。作家が自らの虚構世界を作り出すのにリアリズムの保証として医学的な知識ひいては科学的な知識をこのように積極的に利用しようとすると、おうおうにして、とりわけ後世の読者から見ると、作家の意図とは裏腹に科学的知識のこうした利用がかえってあだになってリアリズムを裏切り、荒唐無稽な世界を作り出すことに貢献してしまうということが起こりうる。

前回もすこし触れた医学テクストと文学テクストとの関係について、ここではJ-L・カバネスの意見を紹介して、この点についてすこし検討を加えておこう。

カバネスはフローベールの『ブヴァールとペキュシェ』に言及して、「この小説の虚構については

科学的な観念によって伝達されてきた、デフォルメされた現実のイメージのなかに起源を見いだせる。科学的な知識というのはまさしく虚構的なものなので虚構を養うのだ。」徹頭徹尾リアリズムであれという科学者の意図はどうであれ、現実的にかつ歴史的に見て科学的な知識もまた本質的に虚構であることを余儀なくされている。こうした科学的な知識の本質を見抜いているので、「『ブヴァールとペキュシェ』の作者の態度は［・・・］まさにゾラのそれとは正反対である。フローベールは未来を見越すどころか、それとは反対に過去を探索する。なぜなら彼にとってはどのような思考も時代遅れになることを証明することが重要なことだからである。」[5]

作家がリアリズムを標榜して世界の解釈に本質的にもっともリアリズムを徹底させている科学を利用しようとすると、皮肉なことに必然的に時代遅れにならざるをえない科学的な知識そのものに今度は裏切られてしまう。結局リアリズムの保証を最新の科学に頼ろうとする作家は誰しも時代遅れになることを覚悟しなければならないのだろう。それだから作家は誰しもブヴァールとペキュシェであることを多少とも免れることはできないであろう。

『ジェルメーヌ』においてアブーは、当時最先端を行く肺癆の医学的知識に説話の展開を依拠させ、そこに読者の関心も多分に引きつけることに成功した。そうだとすれば『ジェルメーヌ』の評判もこうした医学的知識の消長と軌を一にするだろう。すなわち『ジェルメーヌ』の魅力がもっぱらそうした医学的知識に支えられていたとしたら、それがまもなくコッホの結核菌の発見などによって乗り越えられて時代遅れに堕し、ことに肺癆の病因論や治療法が大幅な見直しを必要とされるようになると、作品自体も医学的な知識の失効に引きずられて歴史の闇に忘れ去られてしまったと考えられるのである。ちなみに、先のカバネスのフローベールに関する主張に引き寄せて言えば、フローベールとアブーは医学的な知識の扱いに関して対極的な位置にあると言えるかもしれない。

3. ゴンクール兄弟の『ジェルヴェーゼ夫人』

『ジェルメーヌ』の出版から12年後の1869年に写実主義の代表的作家であるゴンクール兄弟（エドモン1822-1896、ジュール1820-1870）が、『ジェルヴェーゼ夫人』という、肺癆で斃れる女性を主人公にした作品を書いている。彼ら兄弟作家はその『ジェルヴェーゼ夫人』以外にも、『ジェルミニー・ラセルトゥー』（1865）では結核を併発しているヒステリー症の女性を登場させ、弟ジュールの死後にも、兄であるエドモン一人でまたヒステリー症の女性の悲劇的な死を描いた『娼婦エリザ』（1877）という作品も書いている。そのことからすれば、「写実主義作家」というものの、彼らが医学的な知識を体系的に活用して小説を作り上げた点では、むしろ彼らには後のゾラなどと同じく自然主義作家という名称を冠した方がよさそうである。

『ジェルヴェーゼ夫人』という小説の題名の元になった主人公のジェルヴェーゼ夫人は、ゴンクール兄弟が名高い彼らの『日記』の中で告白しているように、[6] 彼らの叔母であるネフタリー・ド・クールモン（1802-1844）をモデルにしている。ゴンクール兄弟は日記で見る限り、この叔母に対しては深い敬愛を抱いていたようである。だが、小説になると一転して、兄弟は皮肉に満ちた冷徹な視線を持った小説家として振る舞い、ローマで客死したジェルヴェーゼ夫人の死因である肺癆と神秘主義的狂信との関係を暴き出すことになる。

小説のジェルヴェーゼ夫人のモデル、ネフタリー・ド・クールモンは1802年生まれで、旧姓はル・フェーヴル、1823年にジュール・ド・クールモンと結婚してクールモンを名乗ることになった。アル

チュールとアルフォンスの二人の男児を設け、長男は精神遅滞児で1841年に10歳で亡くなる。その頃かなり重症な肺癆に罹っていたネフタリーは長男の喪の悲しみを癒すことと自らの病気療養のため、残った当時7歳のアルフォンスを連れてローマに旅立つ。アブーの『ジェルメーヌ』の時もそうだったが、当時転地療養は肺癆の有効な治療法とみなされていた。ローマは温暖湿潤な地中海気候が肺癆によいとみなされて、療養地として『19世紀ラルース大辞典』にも名があがっているし、『ジェルヴェーゼ夫人』の中にも、先例としてシャトーブリアンとボーモン夫人が療養のためにローマを訪れたことが記されている。[7] ローマに移住したネフタリーはやがて神秘主義的カトリック信仰に傾倒していき、それと並行して以前の合理主義的な性格を失ってしまう。その熱狂的な信仰熱が高じるにしたがって、肺癆の方も重篤化していく。そうして彼女は1844年5月に死去するにいたる。[8]

ゴンクール兄弟が敬愛する叔母を小説に取り上げた最大の動機を探ると、ガブリエル・ド・ブロイが語っているように、[9] 彼女が転地療養に訪れたローマで早くも3年後に死去したことに加えて、それがパリ時代からは想像できないカトリックの神秘主義に溺れ込んだあげくの死がそれであったと想定される。したがって作品を書く目的が叔母の神秘主義への回心と早すぎる死を解明することにあるとすれば、当然のことながらゴンクール兄弟の代弁者として語り手の向ける小説の主人公に対する分析的視点は冷静で批判的なものになっていくだろう。そのときわれわれの主題である肺癆は、神秘主義に対する最も有効な批判的分析対象としてある。

端的に言うと、小説の語り手が展開しようとするのは、肺癆という病気が主人公のジェルヴェーゼ夫人をして自らの生命を文字通り賭すまでに傾倒させた神秘主義を異常に昂揚させた、という主張である。すると肺癆というのはこれまでそれが担っていた不治の病、つまり絶対的な死因という役割のほかに、ジェルヴェーゼ夫人に関しては神秘主義への傾倒を助長させるという役割を担うようになる。『ジェルヴェーゼ夫人』の神秘主義と病気の関係については、肺癆のほかにもヒステリーが関係してきてなかなか一筋縄ではいかないのだが、[10] ここでは肺癆に焦点を絞って議論を進めよう。

1章でジェルヴェーゼ夫人の肺癆に対する最初の言及がある。そこではイタリアとフランスの肺癆に関する民間の病理学思考の相違が透けて見える。

> 「あら、奥様は体の具合がお悪いのかしら？」と貸し主の婦人はゆっくり言った。彼女の心中には胸の病気がうつるのではないかというローマの間貸しの女たちが一般に持っている恐れが忍び込んできたからだった。それはシャトーブリアンがド・ボーモン夫人のためにローマで最後のすみかを求めていたときすでに経験したことであった。[11]

間貸しの婦人に代表されるようにイタリア人たちが肺癆がうつるのではないかと恐れているに対して、肺癆を患っているジェルヴェーゼ夫人はもとより、彼女の周囲のフランス人の方はいっこうにこの病気を恐れている気配がない。この小説にジェルヴェーゼ夫人のパリにおける主治医として登場してくるガブリエル・アンドラールは実在の高名な医学者であり［1797-1876］、『19世紀ラルース大辞典』の「肺癆」の項にも登場している。実はそこで彼は肺癆患者と同居を避けるよう助言している、つまり肺癆の感染説を唱える医学者として紹介されているのだが、実際にはクールモン夫人の主治医として、また虚構上のジェルヴェーゼ夫人の主治医としてあるときには、自説に固執することなく、二人の夫人がそれぞれとりわけ感染の危険を恐れなければならない息子をローマに同道していくこと

に関して、何の心配もしていないようである。

『ジェルヴェーゼ夫人』は111章からできている。章の数が異様に多いのは、唯美主義を標榜するゴンクール兄弟のもくろみから、前半のローマの情景描写を中心に散文詩のような短い章でもって小説を構成しようとしたからである。

ところでこの小説の丁度真ん中に位置する56章は、「ジェルヴェーゼ夫人の内部では密かに転換が完成されつつあった。知性に支えられた自尊心、分析的、探求的、批判的精神、しっかりとした判断力、女性には珍しい固有の考え方をしようとする意欲、それらが気質（tempérament moral）の変転、つまり一種の性格反転の影響で次第に彼女のうちで衰えていったのである」[12]、という文章で始まる。そしてそこまでジェルヴェーゼ夫人の回心の観点からすれば比較的緩やかに、表だった急激な変化も見せずに展開してきた物語が、ちょうどこの章を境に神秘主義的信仰の異様で過激な記述が目立つようになる。すなわち小説自体は形式的にも内容的にもここからがはっきりと後半だと見なせるような意図的な構成になっている。

すでに触れたように、小説の冒頭でローマに来て宿探しをするジェルヴェーゼ夫人が肺癆を患っていることは読者にすでに告げられていた。それから2章で「水薬」に関する記述があるのだが、それ以降後半部になるまで肺癆については直接言及されることがない。小説の登場人物ジェルヴェーゼ夫人の立場で考えると、前半部でおよそ2年近く時間が経過するのにローマの間貸し人から恐れられた「胸の病気」がほとんど話題にならないのは、病状がほとんど進行していないか、あるいはそれよりもっと可能性がありそうだが、病気そのものは自らの内部で密かに進行しているにもかかわらず、ジェルヴェーゼ夫人がそれを意識することがないほどほかのことに気を取られていた、と作者のゴンクール兄弟が想定したのであろう。だがこれは小説の登場人物ジェルヴェーゼ夫人の立場に立って考えたときの話である。

小説の基本的構造の審級には登場人物のほかに語り手の立場が考えられる。作者のゴンクール兄弟には、主人公のジェルヴェーゼ夫人を通して神秘主義的カトリックへの回心と肺癆に起因する彼女の早すぎる死、およびそれら両者の関係を解明することがこの小説を書く重大な契機としてあった、というのがわれわれの当初の見解であった。そのため作者の小説中の代弁者たる語り手には、主人公と別の立場にたって、具体的には小説の主人公の思考や行動を論理的に追っていこうとする観点があってしかるべきだと考えられるし、それはこのような分析的な意図を持った小説にあってはことのほか重要な意味を持つであろう。

そのような語り手の立場から見たとき、前半部で問題にされているのは肺癆よりもむしろヒステリーだと言える。だが端的に言うと、ヒステリーがジェルヴェーゼ夫人を死に追い込むことはないし、当時の病理学に照らして考えてみてもそのようなことはありえないことである。ヒステリーについては別稿を参照してもらうとして、[10] 小説の構成に絡めてヒステリーと肺癆の関係についてだけここで簡単に振り返ると、前半部で顕著なヒステリーは主人公を神秘主義に誘導する重要な要素のひとつであったと考えられるが、しかし彼女を死に至らせる決定的な死因とはなりえなかったので、語り手の分析的な立場から後半部においては当時の死病であった肺癆に焦点を当て、それと神秘主義との関係を考察することに力点を置いたと見なすことができる。

4. 肺癆の自然主義的考察と神秘主義

後半部で初めて持病の肺癆に触れているのは89章であり、そこでは主人公の立場から彼女の信仰と関連づけて病気に対する考え方が述べられる。以下はいわばゴンクール兄弟の肺癆に関する自然主義的考察と言って差し支えないだろう。

> ジェルヴェーゼ夫人は何日かかなり体の具合が悪いと感じたが、そのまま病気を受け入れて、進行するにまかせた。それは厚い信仰を持った女性にしばしば見られる、あの敬虔な諦めの気持ちに由来するものであった。つまり彼女は、自らの健康が神の御手の中にあり、本当のキリスト教徒ならそれに心を砕く必要はないと考え始めていたのである。苦しみは一種の精神的進歩であると彼女の目に映るようになった。彼女はどの医者にも、モンテローネ博士にも見てもらおうとしなかった。[13]

「ヨブ記」のヨブを典型として、キリスト教に関係する文学作品には、病気を神の課す試練や贖罪と見なす考え方があり、ジェルヴェーゼ夫人が自らの病気を上記の引用のように考えることも取り立てて言うほどのこともないであろうし、いよいよ彼女の信仰が神秘主義的な傾向を強めてきたとすれば、それに神秘主義的信仰というのがそもそも神を絶対的存在として仰ぎ世の中の森羅万象をそれに従わせて考える考え方であるから、むしろ彼女のような考え方をすることがきわめて当然のことであろう。

それよりもここではジェルヴェーゼ夫人の病気に対する意識の変化そのものに注目しておきたい。ここまでの物語の進行を追うと、彼女の意識は詳述されているように神秘主義的カトリック信仰に次第に集中していくに対して、持病についてはほとんど関心を示すことがなかった。それでもわれわれが想像するに、それまでの彼女はローマ移住の動機からして病気については何とか直せないものかと思っていたであろう。すなわち、信仰を深めることと病気を治すこととの間には何の関係もないし、両者が呼応や背離するような密接な関係にはない、と考えるのが一般的であろう。

しかし神秘主義的信仰への傾斜が深まると、すべてがキリスト教との関係によって解釈し直され、あらためて判断を下されるようになる。つまり、ジェルヴェーゼ夫人が持病の肺癆を自らの信仰と密接に関係し、それと一体をなすものと考えるようになったのは、ここで彼女の神秘主義的思考がいよいよ深まったからだ、と言い換えることができるのである。そしてその結果として、彼女が神秘主義的信仰を深めようと意識するのとは対照的に、彼女の病気の方は病気としての現実性を失い、彼女にとっては信仰の一種のメタファー的役割を果たすだけになるのである。神秘主義的傾向がいっそう深まれば、先の「ヨブ記」やユイスマンスの『スヒーダムの聖女リドヴィナ』のように、病気の深刻さこそ神の与える試練の意義深さを示すものとみなして、ジェルヴェーゼ夫人が以前の考え方とは全く逆に病気の進行を歓迎するようになるかもしれないであろう。ここでわざわざ指摘するまでもないかもしれないが、病気をメタファーとみなす考え方は、聖書の時代からキリスト教によって慣らされてきた、根の深いものである。

したがって、一方でたとえば病気を放置しておいて何のために信仰に救済を求めるのかというような常識的な考え方からすると、ジェルヴェーゼ夫人のローマで顕著になってきた性行は信じがたい、奇異なものとして映るので、彼女の周囲では彼女のことが心配になって医者や旧知の人たちが親身に

なって忠告をする。ところが、他方のジェルヴェーゼ夫人の方でそれに一向に耳を貸す気配が無く、彼らを逆に遠ざけるようになるのは、彼女の立場からすれば、一方の信仰の深まりと他方の持病の重篤化の放置とのあいだに一体的で整合的な関係が認められるため、自らが論理的に一貫した行動をしており、そこに論理的破綻や矛盾など無いという確信があるからであろう。

だがそれとは別に、小説には彼女とは立場を異にする彼女の性行に分析的な視線を投げかける語り手が存在していた。それはゴンクール兄弟の代弁者として語り手が、今見てきたジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的性行を、彼女とはまったく別の視点から冷静に判断しようとする、つまり作者の医学的な知識を体系的に活用して批判的に分析しようとする立場である。われわれはそれに93～94章で出会う。そこでは、先の引用と同様夫人の肺癆と信仰に関して、だが今度は語り手の医学的な観点から分析が試みられている。その意味でこの個所は、作者のゴンクール兄弟が小説を書く動機になった、神秘主義的カトリックへの回心と肺癆による早すぎる死という疑問を解明するための重大な局面を構成していると言える。そこで語り手＝ゴンクール兄弟は、その疑問について生理学的考察をするのだが、しかし現代の眼から見ると彼らの推論が不器用で、突飛に見えてしまうのは、時代の限界のせいもあって致し方のないことかもしれない。

> 夫人の精神や想像力を錆び付かせたり、体液そのものをも濁らせたりするような、身体の下部にある卑しい器官がかかる病気に対して、人間の上部にある高貴な部分のかかるこの肺癆という病気は、患者のなかに、好もしくて、心を動かす、昂揚させるような何かを、善や美、理想のうちに物事を見ようとする感覚を、言い換えればこの世ではほとんど感じ取れないような、一種の人間の崇高な状態を生じさせるという特徴を持っている。[14]

ソンタグが指摘していることだが、[15] 人間の生命維持にとってきわめて重要な器官である肺を病座にしていることによって、肺癆は西洋では精神性を帯びた病気だと考えられてきた。それから前回（「19世紀のフランス文学と結核（前編）」）見てきたように、肺癆はゴンクールの直前の時代にロマン主義によって美学的に洗練されるという歴史を経てきた。こうした傾向はもちろんゴンクールの時代にも続いており、この小説の語り手自身も別の個所で「この病気、ほとんど目立たぬようにジェルヴェーゼ夫人の生命を消し去っていく肺癆というのは、精神と成り変わった肉体が精神の超常的状態を希求しようとする神秘主義を、法悦状態への志向を、不思議と助長する」[16] と重ねて述べて、肺癆の霊的性質や神秘主義との深い結びつきを強調することで、作者や語り手もまたそのような西洋の伝統を引き継いでいることをを証している。

だがそれに加えて、われわれがゴンクール兄弟を自然主義作家と呼ぶにふさわしいような肺癆に関する考察がこの小説に存在していることも強調しておかなければならない。今度はジェルヴェーゼ夫人の肺癆に起因する神秘主義を生理学的に説明しようとしているくだりである。

> 消耗熱から体が痩せるとともに筋肉も弱って、落ちてしまい、この病気特有の空洞がもたらす荒廃から肉もだんだんと死にかけてきている。このように身体的存在が次第に非物質化してくると、それと反対に彼女は宗教的な愛のせいで聖なる狂気へと、幻覚性の法悦境へと徐々に引き上げられていくのであった。[17]

ここでわれわれが注目するのは、語り手が訴えている生理学的考察の不器用な内容ではなく、先程来の引用にも現れているように、語り手が肺癆と信仰の関係を何とか科学的に、生理学的に解き明かそうとする対処の仕方に関してである。つまり語り手は、ますますあらわになってきた異様なジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的信仰を、客観的、科学的な立場から病的行為として解釈しようとしている点である。語り手は要するに肺癆が生理学的に神秘主義を大いに助長していると見なすのだ。

さらに語り手は踏み込んで、夫人の神秘主義を精神病理学の側面から分析しようとする。これもまた93章からの引用である。

> しかし肺癆はとりわけその特徴ある作用をジェルヴェーゼ夫人の脳に及ぼしたので、彼女の思考の原型が信じがたいような変貌を遂げてしまったのである。[・・・] 彼女の脳は元の純粋な状態まで縮小してしまい、脳の実質として必要とされるものだけしかそこには残らず、しかも病気による衰弱と消耗でこれまで蓄積されてきた抽象的観念や経験的知識が頭から漏れ出て空っぽになってしまった。その結果、子供の最初の頃に戻った、胸を患う40歳の女性の脳には、12歳の少女が最初の聖体拝領の時に抱くような純粋な考えがよみがえってきていた。[18]

ここで語り手＝ゴンクール兄弟は、肺癆という病因から説き起こし、精神病理学的推論によってジェルヴェーゼ夫人の神秘主義を何とか説明しよう努めている。だが、素人目から見ても、それにはかなり無理があると断じざるをえまい。ただし、ネフタリー・ド・クールモン＝ジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的カトリックへの回心と肺癆による早すぎる死という疑問を解明するというゴンクール兄弟＝語り手の側に立ってみれば、この小説の所期の目的は曲がりなりにも達成されたと言ってよかろう。そういう意味では、この個所は作者にとってかなり小説の成否を左右する決定的な個所であったし、また読者にとっても小説を判断する上で重要な個所のひとつかもしれない。

考察が不十分であるとの多少の恨みは残るかもしれないものの、肺癆と神秘主義の関係を登場人物の立場からも、語り手の立場からもそれなりに解き明かしてしまえば、この小説に残るのは信仰と病気が一体となって終局へと向かうことだけである。つまり、ジェルヴェーゼ夫人の神秘主義的信仰の究極目的はキリストとの永遠のコミュニオンを成し遂げることだし、それはとりもなおさず彼女の肺癆による死を意味する。かくして小説は神秘主義的信仰と肺癆の相乗効果のせいで主人公のジェルヴェーゼ夫人に早すぎる死を迎えさせるのだが、それは主人公の立場からすれば神秘主義的信仰の成就として捉えられたであろうし、また語り手の立場からすれば当初は不分明だった神秘主義的カトリック信者の迎える病理現象としての結末となる。

【注】

(1) Edmond About, *Germaine*, BiblioBazaar, 2007. 以下本書からの引用については書名とその後にページ数を付すにとどめる。

(2) *Dictionnaire encyclopédique des sciences médicales*, sous la direction de Raige-Delorme et A. Dechambre, Victor Masson, 100 vols, 1864-1889.

(3) *Ibid.*, vol. 24, pp. 805-807.

(4)『最新医学大事典第2版』、医歯薬出版、1996年。

（5）Jean-Louis Cabanès, *Le corps et la maladie dans les récits réalistes*, Klincksieck, 1991, pp.215 et 216.

（6）Edmond et Jules de Goncourt, *Journal* III（1887-1896), pp. 752-753.

（7）Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais, Œuvres Complètes*, t. XXX-XXXI, Slatkine Reprints, 1986, p. 9.

（8）ネフタリー・ド・クールモンの伝記については下記に詳しく述べられている：«Nephtalie de Courmont» de Gabriel de Broglie, *Cahiers E. & J. de Goncourt*, no 1, 1992, pp. 6-12.

（9）*Ibid.*, p. 9.

（10）『ジェルヴェーゼ夫人』における病気と主人公の神秘主義との関係の詳細については、別の拙論（«Les maladies dans *Madame Gervaisais*»、印刷中）を参照されたい。

（11）Edmond et Jules de Goncourt, *Madame Gervaisais*, édition présentée, établie et annotée par Marc Fumaroli, coll. Folio, Gallimard, 1982, pp. 68-69 ou *Œuvres Complètes*, t. XXX-XXXI, Slatkine Reprints, 1986, p. 9.

（12）*Ibid.*, p. 176 [Folio] ou pp.150-151 [Slatkine Reprints].

（13）*Ibid.*, p. 228 [Folio] ou p.219 [Slatkine Reprints]. ところでゴンクール兄弟は女性の信仰に関して『ジェルヴェーゼ夫人』以前から特殊な見方をしていた。以下の引用は『日記』の一節で、小説の出版から15年も前に記されたものであるが、女性嫌い（misogynie）で評判だった彼らの面目を躍如させる主張であろう。

女性にとって宗教というのは男性が従うような行動基準としてあるのではない。それは愛情の吐露や、小説で見るような献身的行為の機会となる。若い女性ならだれはばかることなく真情を吐露できるし、精神を高揚させたり、神秘的な愛の冒険をすることを許されるからだ。また聴罪司祭があまりにも優しく、あまりにも人間的であれば、彼女たちは厳格な司祭のところに飛び込んでいって、微温的な生活を、人為的な感動からなる生活に取り替えて、彼女ら殉教者たちの目にも、何かしら魅力のある、超人的なものを感じさせてくれる苦難を味わおうとする。[1854年5月20日, *Journal* I, Texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Robert Laffont, 1956, p. 100.]

（14）*Ibid.*, p. 241 [Folio] ou p.237 [Slatkine Reprints].

（15）「結核は体の上部の霊化された部分にある肺が持つとされる性質を引き受ける」(Susan Sontag *Illness as metaphor*, Penguin books, 1991（1st publishing in 1978), p. 18［邦訳『隠喩としての病』富山太佳夫訳、みすず書房、1982年、p. 25］「隠喩的な意味では、肺の病気は魂の病気である」(*Ibid.* [p.26])。訳文は上記邦訳による。

（16）*Op. cit.*, p. 241 [Folio] ou p.236 [Slatkine Reprints].

（17）*Ibid.*

（18）*Ibid.*, p. 241-242 [Folio] ou p.237 [Slatkine Reprints].

【本論考は平成19～21年度科学研究費補助金の支援による研究、「三大社会病（結核、梅毒、アルコール中毒）と自然主義期の小説」の研究成果の一部である】

[Résumée]

La tuberculose dans la littérature française du XIXe siècle (IIe partie)

TERADA Mitsunori

La tuberculose est parfois mentionnée comme maladie incurable dans la littérature du XIXe siècle. On sait bien qu'il y a eu au cours du siècle un grand événement qui fait époque dans l'histoire de médecine. C'est la découverte du bacille de Koch en 1882. Est-ce qu'elle n'a pas exercé aucune influence sur la littérature ? Susan Sontag a décrit comment la maladie fonctionne comme métaphore dans la littérature dans son essai excellent intitulé *Illnesse as metaphor* (1978). Est-ce que nous n'avons plus rien à ajouter dans ses études ? Nous prenons ici les romans français du XIXe siècle qui sont inséparables avec la tuberculose et essayons d'en analyser des fonctions narratologiques. Dans cette IIe partie nous avons pour objet *Germaine* (1857) d'Edmond About et *Madame Gervaisais* (1869) des frères Goncourt.